

3月29日、岐阜県中津川市のサラダコスモの本社で、「パラグアイ日系農協中央会常設展示場開設式典」があった。

(株)サラダコスモの中田智洋社長は、日本に食料危機が到来したならば、南米の日系農家から食料を輸出してもらおうと2000年に(株)ギアリンクスという会社を設立、南米各国を回って、日系人農家と連携を深めて強いパイプをつくってきた。今回は、パラグアイで大豆やトウモロコシを栽培している日系農協のためのショールームを自社の玄関ホールにつくった。

この日の式典で中田社長は、「ギアリンクスという会社は、アルゼンチンに約1200haの農地を確保し、現地の日系農家の方々に大豆を植えてもらっています。南米各地には日本人以外にイタリア、ドイツ、オランダなど各国からの移住者がいて、それらの国では移住者が栽培した農産物を本国に輸出する時は、メード・イン・ドイツだったり、メード・イン・イタリアという表示が許されているのですが、残念ながらわが国ではあくまでも外国産の表示をしなければなりません。私は日系農家の人が作ったものはメード・イン・ジャパンでもいいではないかと思っ

たと思っていますが、それが許されませんので、『MADE BY JAPANESE』とごう表示にしたいと思っています。」

ギアリンクスのギは岐阜県のギ、アルゼンチンのアです。リンクスはつなぐという意味で、岐阜

とアルゼンチンをつないで、食料危機の時はせめて岐阜県民だけは生き伸びようというつもりで命名した名前ですが、今ではもつとおおらかに、危機が到来したら日本人すべてを救うことができるようにという思いでやっています」と

## 岐阜県中津川市・サラダコスモの本社に、パラグアイ農協生産品の常設展示場を開設



ギアリンクスが誕生するきっかけとなったのは、梶原氏が知事時代に策定した「岐阜県民食糧確保計画」だった。



常設展示場のテープカットをする、写真右からギアリンクス(サラダコスモ)の中田智洋社長、パラグアイ大使の田岡功さん、パラグアイの日系農協中央会会長の内山新一さん。

でいる。今回の展示場は、ギアリンクスと関係が深いパラグアイ日系農協のために開設したもので、この日の式典には、パラグアイ特命全権大使の田岡功さんほか、現地の農協の組合長4人も出席していた。



この日は、サラダコスモでの式典の後、中田社長の自宅で二次会が開催され、参加者同士の交流を深めた。



本社の玄関ホールには、パラグアイやアルゼンチン産の大豆やトウモロコシ、ナッツが展示されている。

スピーチをした。普段から現地とのパイプを強くしておくために、ギアリンクスでは毎年、日本からの視察ツアーを企画している。中田社長自身はすでに40回を超えて南米に足を運ん

大使の田岡さんは、日本国籍を離脱して、パラグアイ国籍を取得してパラグアイ大使になったという珍しい方である。田岡さんは、現地の日系人から頼りにされているだけでなく、パラグアイ政府の

氏も出席していた。「私は、全国知事会の会長をしていた時に、財団法人海外日系人協会の会長もしていたこともあり、海外に移住した人たちに對して日本は非常に冷たいと感じま

信頼も厚く、政権が変わってもその職にとどまるように懇願されるほどだという。「私は14歳の時に、故郷の徳島から両親と共にパラグアイに移住して、47年たちました。パラグアイにいる時はほとんどスペイン語で

採算を考えると非常に難しい事業だが、この事業は「同胞との友情」が支えになっ

た。それなのに、移住した日系人の方々は、日本人がなくなってしまうと勤勉さとまじめさ、礼儀正しさを持って異国の土地で懸命に頑張っている。それが、本心に頭が下がる思いであります」とあいさつした。

政府が冷たいからではないだろうが、民間企業のギアリンクスは、目先の損得抜きで南米の日系農家と親しく交流し、応援している。考えてみれば、グローバル時代といってもわれわれは南米のことをほとんど知らない。中田社長でさえ、最初に南米を訪ねた十数年前までは、パラグアイとウルグアイの区別がつかなかったという。「だからこそ、パラグアイのことをもっと多くの人に知ってもらいたいと思って、展示場には地図も掲げました。ここにはパラグアイとアルゼンチン産の、遺伝子組み換えでない大豆、トウモロコシ、ナッツ、ニンニク、それらを原料としてつくった豆腐、みそ、しょうゆなども陳列してあります。南米は寒暖の差が大きいので高タンパクの優れた大豆ができますので、豆腐やみそもおいしいものがつくれるんです」と、中田社長。

食料危機が到来した時のためと